
スターチス

檸檬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スターチス

【Nコード】

N9814Q

【作者名】

檸檬

【あらすじ】

スターチス。

花言葉は『永遠に変わらない心』

一輪

「リイツー!!」

「ん？」

あたし、結城璃緒 y u k i - r i o を呼ぶのは
双子の結城玲緒 y u k i - r e o

「帰ろっ」

玲緒や少ない友達以外には無愛想なあたしと
違って、人懐っこい玲緒。

「ごめん、用事あるから先帰ってて」

そついうとシュン・・・となる。

でも仕方ない。

「たまにはハルと帰ってあげな？」

「用事終わるまで待つてる！！」

「ハルが寂しがってるよ」

ハルとは井浦春樹 i u r a - h a r u k i の事で、
玲緒とあたしの幼馴染で親友。

「誰が寂しがるか！！」

「ったあ・・・」

一応あたし女なんだけど。

「ハルも待つてればいいじゃんっ」

「イヤ。ほら、帰るならさっさと帰るぞ」

二人が教室を出てくとき、
ハルがこっちをチラッと見た。

「璃緒、終わったら電話しろよ」

「ん、了解」

ハルは知ってる。

あたしの“用事”が何なのかを。

「リイ早く帰ってきてよーっ!!」

引きずられながら叫んでる玲緒に
軽く手を振って“用事”の場所に向かった。

――――。――。――。

「おっそおーい!! 遅刻よお結城さん」

「…………。」

体育館裏にはケバいパンダ数人。

「ちょっと聞いているの!？」

耳障りな声、耳塞ぎたいくらい。

「っほんつとムカつく!!」

ケバい化粧のパンダ集団のリーダーっぽい
パンダAに肩を押されて尻餅をついた。

「キャハハッ!!だっさーい」

あーうるさい・・・

「気、済んだ?」

見上げて無表情のまま言った。

「っ!やつちゃって!!」

顔が真っ赤になりながら仲間に命令。

「泣けきなさいよっ!!」

パンダ数人に殴られ蹴られ。

それも見えない所に。

「今日はこれくらいにしてあげるわ」

数分経つとそう言い残して去って行く。

一週間に1、2回。

玲緒やハルと仲良くしてるのが
パンダ達は気に食わないらしい。

「もしもし？ハル？ん、終わった」

「は？帰れる。．．．わかったよ。」

いつもの所だから。じゃあね「ピッ．．．

ハルにはたまたま見られてしまつて、
その日からコレが終わつたら迎えにくる。

「璃緒．．．大丈夫か？」

「大丈夫」

差し出された手をとって立ち上がる。

「玲緒にはいつ言っんだ」

「言わないよ。あの子達は玲緒が好きな
だけなんだから」

だからといって距離を置くつもりも
さらさらないけど。

「っ．．．お人好し馬鹿」

優しいハルに何もするなっつてのは
キツいってわかってるけどダメ。

「早く帰らないと玲緒が拗ねるから帰ろっ」

拗ねたら多大な被害がこっちにくる。

「ああ、帰ったらまず湿布とか貼れよ」

どこまでも心配性．．

二輪

「……ガチャ

「ただい「おかえり」」

「ただいま、玲緒」

あ……痛い。

抱きつかれて傷にダメージが。

「ねえ璃緒」

寒気……璃緒って呼ぶときはマジなとき。

「さっき、ハルといたよね」

「っ……」

まさか見られてるとは思わなかった。

「そうゆうんじゃないのは分かってるけど
俺、嫉妬深いの。知ってるでしょ？」

「んっ．．．ちよ、ここ玄関．．．っ．．」

双子だけどこれでも付き合ってたりする。

「ふふっ．．．今日は外で食べるって。
用意しよっか」

じゃあ父さんいるんだ。

「．．．．バカ」

キスしたからか、ご機嫌な玲緒に手を
ひかれながらあたしの部屋にいった。

「ドアの前で待ってるね」

「．．．．．？」

後からもリビングで会ったから、
先に降りてればいいのに。

「これでいつか・・・」

黒の肩だしニットに短パン、黒白ニーハイ。
ミルクティー色の髪を軽く整えて
ドアを開けた。

「可愛い」

そーゆう事なりふり構わず言わないでよ・・・

「横向いて」

なんで？とか思っけどとりあえず、
言う通りにする。

「でーきた」

耳いじってたからピアスだろうけど・・・

「・・・なんで？」

今日は誕生日でも何でもないはず・・・

「これ。ほんととはペアなんだけど、

片方ずつね。リイが左耳、俺が右耳」

玲緒の長めの髪を上げてピアスが見える
様にしながら説明された。

「リイは俺のモノって事」

“俺のモノ”って・・・

「父さん達待ってるし行こうか」

ちゅつと軽いキスをされてリビングに
向かった。

「あら！お揃いねえ」

「ははっ相変わらず仲良いな」

夫婦円満な家庭。でも実は再婚で、
母さんの連れ子があたし。
父さんの連れ子が玲緒。

だから血は繋がってない双子。

名前が似てるのは、
交通事故で死んだあたしの父さんと
今の父さんは高校時代からの親友で、
あたしの母さんと病死した玲緒の母さんが

あたしと玲緒の出産日が被ってて、
生まれた日も同じだったから
4人で名前を考えた結果こうなった。

「じゃあ、行きましょ」

「どこに食べに行くかな」

昔、玲緒が大きくなったら戸籍外して
結婚したいって言ってた。

そこまで考えてるのが嬉しかった。

「リイは何食べたい？」

「．．．玲緒の食べたい物」

「．．．．．璃緒食べたいな」

運転席と助手席に座る母さん達に
聞こえないように耳元で囁かれた。

「．．．!!．．．っん．．」

耳を舐められる感覚に体が反応して、
声が出るのを必死に抑えた。

「続きは帰ってきたらね」

涙目になってるあたしを見て微笑んで
体を離れた。

三輪

あれから中華料理店で食べて、
家に帰って、眠くなってベッドに寝転んだ。

．．．で？

何この状態。

「りーおゝふふ、可愛いつ」

なんであたし、玲緒に組み敷かれてんの？
え、ベッドって危険じゃない？

「れ、玲緒．．．？」

「ん？なあに？」

「なんでいるの」

「ココ、俺の部屋でもあるし」

う、確かにそうだけど．．．

「それに、リイは俺の。でしょ？」

「――・・・・・・・・っ」

あたしの首筋にキスをおとしていつて、
最後に痛みがして顔が離れていった。

「璃緒のそういう顔、好き」

「跡付けたっ・・・・・・・・!？」

「明日、制服ブラウスのボタン
ちゃんと閉めないと見つかったらうね」

いつも2つ開けてるだけなのに。

「変態ドSっ・・・・・・・・」

「ん？最後までしてほしいの？」

無理に決まってんでしょ。
お腹とか痣になってるだろうし。

「ふ．．．今日はリイのベッドで寝よう」

今日“は”？ “も”じゃなくて？

「おいで、」

心の中で毒付いてみても、
大人しく抱き締められてるから結局好き。

「おやすみ、リイ」

「おやすみ、玲緒」

――．．．
――．．．

「リイ、おはよ」

「んー．．．玲緒．．．」

「ほら起きて。遅刻ギリギリだから」

「・・・・・・・・・・はっ!？」

携帯を開くと7:50と画面右上に映ってる。

「遅刻・・・・・・・・!!」

授業態度があまりよくないあたし達に
遅刻は御法度。

「ーっ!!玲緒あっちむいて」

「なんで?下着姿くらい見せてよ」

「////嫌!!玲緒も着替えてっ」

渋々と後ろをむいてきgaeはじめたのを
確認してあたしも着替える。

「玲緒おわったよ」

あたしを見て目を見開き、笑った。

「さすがリイ。期待してたよ」

嬉しそうにニコニコしながらあたしの頭を撫でる。

「??？」

昨日のキスマークの事を忘れてて、いつも通りの着方でキスマークが見えてるなんて気づかなかった。

四輪

「「ギリギリセーフ」」

「いや、アウトだろ」

教室に着いたらもう担任のタケちゃんがいた。

「えー！！俺達やバいの知ってるでしょー！！」

「タケちゃん、セーフ」

「わかってん．．．．はあ．．．ああ、もういいわ」

突然どうしたんだろう？

セーフは嬉しいけど。

「やった。さすがタケちゃん！！」

席まで行くときあたしを見て顔が赤くなったり驚く人がいたり。

なんなの。

「・・・おい、アホ双子」

タケちゃんがなくなった後ハルが
呆れながらやってきた。

「玲緒、お前ワザとだろ」

「うん、もちろん」

なんかしたの？

「竹村が怒る気力も無くしてたぞ」

「あー、見られたのはイラッとしたけど
結果オーライだよね」

あれ？最初のほう黒かったよ。

「リイ、おいで」

玲緒の近くに行くと、耳元で

「俺のつて跡、みんなに見られちゃったね」

．．．．．は？

「跡？．．．．．っ！！！！」

「気付いた？」

ありえない．．．

「玲緒．．．朝から気付いてたよね」

「ちゃんと閉めないからだよ」

なにを今更。

暑いのに全部閉めてらんないし。

「はあー．．サイアク」

「なんで？」

「あたりまえでしょっ」

みんなに見られるか・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9814q/>

スターチス

2011年9月17日13時29分発行